

## 序

奈良国立文化財研究所が、昭和34年以降、継続して行っている特別史跡平城宮跡の発掘調査も今年で32年目を迎えた。この間の発掘面積は35 haに達し、これは指定地全域の約1/3に当る。その成果の公表は各年度毎の発掘調査概報や木簡概報をはじめ、地域別にまとめた区劃を学報として刊行する報告書も11冊を数え、研究の進展に併せてその内容は質量ともに部厚さを加えている。

今回の学報は第二次大極殿院区劃のすぐ北に接する方180 mの内裏地区東半部分の発掘調査報告である。内裏地区の発掘は早く昭和35年から着手し、昭和37年までに行った調査の成果は既に『平城宮発掘調査報告Ⅲ』（学報16）に公刊している。前回は内裏地区のうち南辺中央部とその東接地域のみであったが、本報告はそれ以後実施した調査、即ち昭和38年の第12次調査に始まり昭和62年の187次調査に至る計7次分の成果をとりまとめた。平城宮跡の発掘調査は朝堂院・内裏など儀式的性格が濃厚で建物の配置がほぼ左右対称と想定される地域では、後世に検証を委ねる意味で東半部のみを発掘し、西半部は特別の場合を除き地下遺構には手をふれない方針を採っている。その点で内裏地区については今回報告分で一応の調査が終了したことになる。そのため先の調査成果についても検討をやり直し現時点での内裏全体像を出来るだけ明確にするよう心がけた。

昭和38年に公刊した前回の内裏地区の発掘調査報告と今回の報告

との最も大きな違いは内裏が平城宮創設当初から長岡京遷都による廃絶に至るまで、終始一貫して同一場所で営まれたという点である。宮跡調査の初期段階では平城宮には朱雀門を入った中央地域に第一次朝堂院・大極殿があり、その東方の壬生門北方地域に第二次朝堂院・大極殿があって、内裏はそれぞれの北に隣接し、中央が第一次内裏、本報告で扱う東方地域が第二次内裏に当ると考えられていた。前回の報告はこの想定を基礎としていたが、発掘の結果第一次大極殿が大きく北に寄って存在し、中央地域には内裏がなかったことが明らかになったのである。今回の報告では天皇が代わるごとに内裏改修が行われ、6期にわたる変遷をたどること、女帝と男帝では内裏の様相がやや異なることなどを解明した。奈良時代の内裏に関する諸問題を総合的に考察し得たものと考えている。

内裏地区は調査期間も長く、その成果のとりまとめは永年の宿題であった。今回ようやく責務を果たすことができたが、これを機に増々精進を重ね、平城宮・京の発掘調査研究の一層の進展を期したい。発掘調査に携わり、他に転出された旧職員に改めて労を謝すると共に、本報告をまとめるに当って御世話になった多くの方々に御礼申し上げます。本報告書の内容その他にわたって忌憚ない御批判と御鞭撻を賜り、今後とも当研究所に御力添えをいただくことをお願いする次第である。

平成 3 年 3 月

奈良国立文化財研究所長

鈴木 嘉 吉